乳幼児期の特性と仏教保育の重要性について 一保育の原点としての仏教保育を再確認するために―

著者	佐藤 達全
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	27
ページ	169-206
発行年	2022-03
URL	http://doi.org/10.24791/00001049

Creative Commons : 表示
http://creativecommons.org/licenses/by/3.0/deed.ja

乳幼児期の特性と仏教保育の重要性について

――保育の原点としての仏教保育を再確認するために――

佐藤　達全

一、はじめに

幼児教育に関するさまざまな変革が進む中、平成27（２０１５）年4月に「子ども・子育て支援新制度」がスタートした。これは、幼児期の教育・保育の「量」の拡充と「質」の向上を進めるために始められた制度とされる。そして平成29（２０１７）年3月31日に、幼稚園教育要領と保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が歴史上初めて同時に改訂（定）・告示された。

改訂（定）の目的は、「すべての子どもに質の高い幼児教育を提供する」ことである。三法令を同時に改訂（定）した最大のねらいは「幼稚園・保育園・認定こども園の、どの施設に入園しても一定以上の質が保証された幼児教育を受けられるようにすること」と言われる。そのため、もともとは児童福祉施設である保育園も「幼児教育を行う施設」と初めて位置づけられ（保育所保育指針・総則４）、保育園でも３歳以上の園児に対して幼稚園と同様の「教育」を行う

ことになったのである。また、今回の改訂（定）では、乳児期からの発達と学びの連続性、さらに「小学校教育との接続のあり方」が示され、「幼児期の終わりまでに育てたい10の姿」（総則・第2）として明記されている。

こうした保育の質を保証するためには、保育者の質を高めることが不可欠なのだが、筆者には卒業後にそのような教育を行おうとしている学生の実態に多くの問題があるように思えてならない。そこで、今回の改訂（定）で示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」も手掛かりにしてそのことを指摘するとともに対応を考えてみたい。その理由は、幼児期の教育は人間としての土台作りだからである。

二、仏教保育が重要と考える理由

動物学者のポルトマンが「生理的な早産」と指摘したように、人間の赤ちゃんは非常に未熟な状態で誕生するが、誕生後は目を見張るほどの成長がみられる。その際、どのように成長するかは、生得的な側面だけでなく周囲の人的・物的・自然環境などから大きな影響を受けることは言うまでもない。

ところで、以前の日本では乳幼児が「人（ひと）として成長する」ための条件が、比較的豊かにそろっていたのではないだろうか。しかし、都市化や核家族化が進んだ現在の日本では都市部であるか否かを問わず「人として」生きていくための意識や行動力を形成するための環境が相当に劣化しているように思われてならない。

特に筆者は、〈いのち〉に対する認識が著しく低下していると考えている。いくら「人間は万物の霊長だ」と言われても、生物の一員であることは否定できないのであるから、どんなにＩＴ化が進もうと人はやがて老いていく存在であるし、その生には必ず「終わりの日」が訪れる。また、私たちは「自分一人だけで生きる」ことも不可能である。そうだとすれば、私たちが自分の〈いのち〉をどのように認識して行動するかを考えることは、極めて重要な課題と言えるのではないだろうか。

一般に「仏教は宗教である」と認識されている。もちろん、それは間違いではないが、筆者は「仏教は身体と精神活動を一体として認識する生命論」と考えている。そのことは欧米の研究者が仏教を「philosophy」と認識していることからも明らかであろう。そうした観点から、特に成長発達の途上にある幼児期の教育（それ故、学校としての幼稚園でも「幼児を保育し」と表現するのである）は、「早期の知識教育」ではなく、仏教の生命論を基本とした身心一如の保育こそが重要なのである。

そこで、本稿では保育科学生の〈いのち〉の認識に見られる問題点を取り上げてその原因を考え、それを改善するためには「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を学生自らが自分自身の問題として考えて生活することの必要性を指摘してみたい。ただ、学生も現在の社会の中でその影響を受けながら生活しているのであるから、まず学生を取り巻く現在の社会状況について触れておかなくてはならない。

三、都市化や核家族化で薄れた〈いのち〉の認識

しばらく前から指摘されてきたことであるが、筆者は最近の日本人の意識から「人は死ぬ生きものである」「一度死んだ〈いのち〉は絶対に生きかえることがない」という意識が薄れているのではないかと感じるようになった。現在の日本では核家族化が進んだというだけでなく都市化も進む一方で、日常生活の多くが人工的に管理された環境で営まれている。たしかに人工的に整えられた環境は快適で便利である。

しかし、便利さにばかり目を奪われた現代人は、重要な問題を見落としてしまったのではないだろうか。それは〈いのち〉に対する意識が薄れたことであり、そのような意識の変化が日常生活にも大きな影響を及ぼしていると筆者は考えている。これから論を進めるにあたって参考になると思うので、多少は旧聞に属するかもしれないが、読売新聞に掲載された「死ぬことを学ぶ」と題する署名（医療情報部次長・吉田清久）入りの興味深いコラムを紹介しておこう。

東大病院で救急医療に携わる医師、矢作直樹さんは最近、こう感じるようになった。「人はいつか死ぬという、当然のことを忘れているように見受けられる患者さんやご家族が増えました」病院に来れば治るものと思っていた家族は「いざ死に直面すると、あわててしまう」という。

宗教学者で、東大で死生学を教える島薗進さんは「(病院が)完全看護の体制になって、家族が看病をしなくなり、『死』を迎えることが、家族ではなく、医療が主導して行われるようになった」と話す。

お二人の話から浮かび上がるのは〈死が病院任せになった結果、「死とはこういうもの」ということが十分つかめないまま、身内の死に遭遇してまごつく人が少なくない〉ということだ。

背景には近年、自宅で家族に看取られて旅立つ人が減り、9割が病院や老人ホームのベッドで亡くなっていることがあるだろう。核家族化で、死が日常生活で身近でなくなったことも影響しているかもしれない。

(読売新聞東京本社版：２０１３年2月27日付けから抜粋)

この指摘のように、現代の日本では自宅で臨終を迎える人が非常に少なくなった。それだけでなく、自宅で出産する人もごく少数である。言いかえると、誕生や死といった「人生の一大事」が日常生活から離れた場での「できごと」になったのである。それだけでなく、都市化が進んだ結果、私たちの生命を維持するために不可欠な食料の生産も、多くの場合は生活の場から離れた所で行われている。

これは、社会構造の変化の中で仕方がないことかもしれないが、その一方で「生まれる」ことや「死ぬ」ことがどれほど感動的なできごとであるかを体験することができなくなってしまったことも否定できない。さらに、人が生きるために必ず摂取しなくてはならない食料が、大地に根ざして生きていた野菜や果実であり、人間と同じように餌を食べて生活していた家畜であることすら意識しなくなったのではないだろうか。

その証拠に、都市部の小学生の中には豚肉や牛肉が「豚や牛の肉」であることを知らない児童がいることや、魚の

「切り身」が海の中を泳いでいると考える児童がいるという話を聞いたことがある。こうした意識の変化の先にあることの一つが「人が死んでも生きかえる」と考える児童の出現ではないだろうか。

医師で２００５年に日本女子大学家政学部児童学科教授を定年退職した中村博志は、「死んだ人が生きかえる」と考えている児童の存在について、非常に興味深い調査結果を紹介している。

> 最近の子供たちは、死についてどんな考えを持っていると思いますか。いまから十年ほどまえのことになりますが、金子政雄先生の論文を拝見しました。この論文によると、小学校六年生約三百人に対して「一度死んだ生きものが生きかえることがあると思うか」という質問になんと四分の一が「生きかえる」、さらに四分の一が「生きかえることもある」と回答していた（１９９５年）のです。
>
> 最初はほんとうかなとも思いました。しかし、その後、私も同様な調査を実施してみたところ、２０００年におこなった都内小学校二校の高学年、約４００名の調査では約三分の一が「生きかえる」、三分の一が「生きかえることもある」と回答しております。「生きかえらない」と答えたものは約三分の一に過ぎませんでした。（註１）

発表された内容が「死んだ人が生きかえると思っている小学生が三分の一もいる」という、にわかには信じがたい調査結果のため、その信憑性を疑う意見や調査方法に問題があるのではないかという指摘もあったと聞いている。だが、その後に中学１年生の男子生徒が４歳の幼稚園児を誘拐して殺害する事件（長崎市２００３年７月１日）や、小学６年生の女子児童が給食の時間に同級生をカッターナイフで斬りつけて死亡させた事件（佐世保市２００４年６月１日）が発生した長崎県で同じような調査を実施したところ、中村博志元教授が行った調査結果とそれほど大きな違いが見られなかったという。

このことから、筆者は犯人の責任や犯人の両親の育て方を追求するだけでは原因の究明はできないと考えている。そして、このような事件が起こらないようにするには、広く現在の社会のあり方を含めた背景に目を向けることが不

可欠であろう。特に「生命を尊重する心の育成」が重要であると考えているが、残念ながら学校教育においてもその成果が上がっているとは言い切れない。

その理由は、都市化・核家族化という大きな社会の変化に、教育のあり方が対応できていないからではないだろうか。それは、その後も同様な事件がくり返されていることから明らかであろう。佐世保市では小学生が同級生を殺害した10年後に、高校1年生の女子生徒が同級生の女子生徒を殺害する事件（2014年7月26日）が発生している。しかも、犯人の女子高校生が「人を殺してみたかった」という耳を疑うような供述をしていることが捜査関係者から伝えられた。佐世保市では2004年の事件を教訓に生命を大切にする教育を続けてきたが、悲劇がくり返されたことに無力感が広がっているという。

もちろん、文科省も手を拱いていたわけではない。2004年の佐世保市の事件をきっかけに生命尊重の教育を重視する施策に取り組み、教育基本法の改正に伴う07年度の小中学校の学習指導要領の改定では、道徳で「生命の尊さ」の指導が重点化された。小中学校とも道徳の学習指導要領の内容に「生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する」などと掲げて、重要な項目の一つとしている。

こうした動きに対し、学校関係者からは「道徳の授業が形骸化している」との指摘も出されている。じつは筆者がたまたま目にしたテレビのニュースでも、小学校で行われている生命尊重の授業風景が映し出されたが、それは子どもたちが教室の前に並んで手を後ろに組み「生命を大切にしましょう」と口をそろえて唱えている姿であった。もちろん、これが授業のすべてだなどと言うつもりはないし、熱心な取り組みも数多く報告されているが、ニュースで紹介された内容に幻滅を感じた記憶がある。

道徳教育が専門の貝塚茂樹武蔵野大学教授も「道徳の時間では、命を大切にしようと繰り返すばかりの傾向が強い」ことや、学校で実のある「命の教育」に踏み込めない現実もあることを指摘している。そして「子どもたちとニ

ワトリを育て、食べるなど、命を考えさせようとする教員もいた。だが、そうした試みには同僚教員や保護者が残酷などとして反発した」と、教員間や保護者の協力が得られないなど、「命を大切にする心を育てる教育」への取り組みの難しさを紹介している。（註２）

いずれにしても、日本社会が高度経済成長に向かって進み始めてから半世紀近くが経過し、私たちの生活は大きく変化したのだが、日常生活のスタイルだけでなく「ものの見方や意識」も大きく変化してしまった。その代表が〈いのち〉に対する認識であろう。現代の日本では、誕生や死といった人生の一大事に直面する機会が非常に少なくなった結果、「人は死ぬものである」「死んだ人は二度と生きかえらない」という当たり前の現実が、どこかに置き忘れられてしまったのではないだろうか。

そこで、次にこのような社会に生まれて生活してきた短大の学生の〈いのち〉に対する認識の特徴と学習意欲（態度）について紹介してみたい。

四、保育者をめざす学生の〈いのち〉に対する認識と学習意欲

当たり前のことだが、命に対する認識の変化は、学生の「学び方」や「学習意欲」にも大きな変化をもたらしている。筆者が保育者をめざす学生の教育に関わるようになって40年あまりが経過したが、最近の学生の問題点について次のように指摘したことがある。

本学に入学する学生は、ほとんどが卒業後は保育者になりたいと考えている（卒業生の幼稚園や保育園への就職率は毎年ほぼ１００パーセントである）ものの、そのために必要な知識や技能を習得しようという意欲はきわめて低い。そして、さらに具体的な指摘を行った。（註３）

多くの学生の基礎学力が不足しているため、子どもの身体（健康・発達・小児保健・小児栄養）や子どもの心（乳

児心理・幼児心理）・保育原理や養護原理といった理論科目の学習には困難が伴っている。また、保育活動に不可欠なピアノの技術にも大きな問題がある。さらに、筆者が担当している「日本語の表現法」に関しては、適切な文章表現ができない学生が半数にも達している。そのため、最近は実習先の幼稚園や保育園の担当者から「実習日誌が書けないので、もっとしっかり指導してほしい」との要望が増えている。

五-1、保育科学生の文章力の実態

このような〈いのち〉に対する認識が変化すると、日常生活から「人間が死ぬ」という意識が欠如してしまう。その結果が、「日常生活を漫然と過ごす」ことになるのではないだろうか。そして、それが学習意欲の著しい低下を引き起こしている。

このことは、既に「仏教保育に対する保育科学生の意識変化――「仏教保育」の授業を中心に――」（註4）や「保育者をめざす学生に必要な仏教の生命観――「いかせいのち」の保育について――」（註5）で指摘しておいたので、ここでは、筆者が授業を担当している学生の観察実習（1年生の後期に実施）の実習日誌に見られる「気になる文章」を紹介して、具体的な問題点を指摘したい。

保育者が担うべき役割は、乳幼児の安全を確保しながら成長や発達に必要な援助を行うことである。成長・発達途中の乳幼児は危険から身を守る術を身につけていないだけでなく、「何が危険である」かも理解していない場合が少なくない。そのため、保育者は常に幼児を危険な状況から守る責任を果たさなくてはならないのである。つまり、保育者の資質として絶えず乳幼児の周囲に目を向けて的確に状況を判断し対応することが求められているのではないだろうか。

ところが、最近の学生を見ていると、「これで大丈夫だろうか」「何を考えて実習に取り組んでいるのだろう」「この

ままの状態で保育者になって、子どもの〈いのち〉を守ったり、子どもの望ましい成長・発達の援助をしたりすることができるだろうか」と不安になることが非常に多い。その一つが、注意力や集中力の欠如である。実際、実習評価票には以前よりも「目の前の子どもだけでなく周囲に目を向けてほしい」という指摘が増えている。そこで、今回は実習日誌の文章を取り上げて、どこに問題があるか考えてみたい。

その前に、ほとんどの学生が小学校入学前に幼稚園か保育所を卒園しているので、保育所は学生にとって身近な存在であるが、園児としての経験だけでは保育士の役割や業務を十分に理解することはできないため、事前にある程度の情報を提供しておく必要がある。

しかも、実習期間は11日なので、よほどしっかりと観察する対象を絞り込んだり視点を明確にしたりしておかないと「なんとなく眺めているだけ」で実習期間が終了してしまう。そのため、保育実習指導Ⅰの授業では、初日から最終日まで「何を中心に」「どのような事柄を重点に」「どのような視点から」観察するか、一日ごとに目標を定めて観察したりお手伝いをさせていただいたりするように注意を喚起している。

また、観察しただけでは表面的な理解で終わってしまう恐れがあるので、子どもの行動の理由や想い、保育士の行動の背後にある「理由」や「意図」「ねらい」を掘りさげて考えることの重要性を説明している。その上で、その想いや意図が理解できない場合は積極的に保育士に質問するように促している（ただし、保育士の日常業務は多忙であることが予想されるので、質問するタイミングや質問する際の礼儀について十分に配慮するよう付け加えていることは言うまでもない）。

特に重要な点は、子どもの行動を観察するだけでなく「その想い」を考えることである。そうすることによって、次に行う保育実習Ⅱ（責任実習・担任実習）の指導案作成に大きなヒントが得られるからである。同様のことは保育士の行動の背後にある活動の「ねらい」や「意図」、さらには「安全に対する配慮」なども、保育実習Ⅱ（責任実習・担任実習）で指導案を作成する際の参考になることは言うまでもない。

さらに、部分的に保育士の活動を担当させていただくことによって、自分の保育技術の習得状況や改善点に気づくことができるため、積極的に保育に参加させていただくことが大きな意味を持っているのである。そして、ただ活動するだけではせっかくの貴重な情報を忘れてしまうため、自分専用の実習ノートや実習日誌に記録するよう助言もしている。

このような事柄を踏まえて実習に取り組み、そこで気づいたり考えたりしたことを記録したはずの日誌に目を通してみると、さまざまな問題点が存在することに気づいた。ここでは、学生の注意力と集中力の欠如について紹介してみよう。その理由は、保育士の役割は子どもの生命の安全を守ることが何よりも優先されなくてはならないと考えるからである。

五－2、毎日の活動の振り返りの文章（分量は日誌13行）

ここでは、毎日の活動を振り返って書くＡ４版の実習日誌で13行の「本日の実習の振り返りと今後の課題」欄と、11日間の実習を総括して実習終了後に書く22行の「実習生の全体的な反省・感想・気づき」欄の記述について取り上げる。

その前にお断りしておきたいのは、本稿では文章そのものの書き方の誤りについては原則的に触れないことにしておきたい。その理由は、短大生の文章表現力が非常に低下しているため、15回の実習指導の授業で何回か実際に文章を書いて提出してもらって間違いを指摘したり正しい文章の書き方のプリントを配布したりして文章の書き方の学習を促してはいるものの、かなり厳しい状況であるためである。

実習日誌を読み始めると、気持ちを集中して文章を書いているのか疑わしい表現が次々に目に飛びこんでくる。実習指導の授業では、１日の実習を終えてその日の活動を振り返って下書きをした上で推敲し、およその字数を確認し

て「本日の実習の振り返りと今後の課題」についてはその内容から2段落に分けて清書すると指導の先生が読みやすいこと、「11日間の全体的な反省・感想・気づき」は22行という分量から、起承転結を念頭に4段落か3段落に分けて清書することが望ましいと説明をしている。

ところが、提出された日誌の「本日の振り返り」で段落に分けている学生は10パーセントに満たない。また、11日間の総括でも3段落もしくは4段落に分けていた学生の割合も同程度で、ほとんどの日誌は1行目から22行目までびっしりと文字で埋め尽くされて、段落は全く意識されていないのである。次に気づくことは、緊張して書いているはずなのに注意力が欠如していると言わざるを得ない文章が次々に登場することである。わずか13行の文章で同じ漢字が二度三度登場しているにもかかわらず、一方は正しくて一方が間違っている場合が余りにも多いので、何を考えて書いているのだろうと疑問が湧いてくる。

五-3、注意力の欠如が疑われる文章

筆者が学生の注意力が欠如していると考える理由は、わずか13行の文章に登場する同じ二字熟語や送り仮名で、一方が正しく書けているにもかかわらず他方が間違っている場合が少なくないからである。次に代表的な表現を紹介してみよう（わかりやすいように、その部分に傍線を引き、コメントを加えてある）。

＊今日は4歳児のクラスに入りました。制作をする子もいれば、いろいろなコーナーで室内遊びをしました。いろいろなコーナーで子どもと話ました。一人ひとりが遊びたいコーナーで楽しむ姿を見ることができ、その中で話しかけてくれる子もいて、たくさん関わることができました。→（一方は送り仮名を書いているが、一方は送りがなが抜けている）

＊実習3日目を終えて気づいたことは、友だちと遊んでいる時や話してる時に、自分にとって嫌なことがあると

「イヤだ」と自分の気持ちを伝えて自分たちで話あって解決する子もいれば、まだ保育者の仲立ちを必要とする子もいて、一人ひとりに合った言葉がけをしなくてはならないんだなと気ずきました。↓（一方は「気づく」と書いているにもかかわらず、もう一方は「気ずく」と書いている。「話してる」は「話している」が正しい。動詞の場合は「話しあって」が正しい）

＊給食を食べているときに、周りの子がどのくらい食べ終わっているか、歌ってるときに周りの子がどれくらいの声で歌っているのか、横目でチラチラ見ているなど他の人のことが気になるようすが見られました。また、仲の良い子と同じ遊びをして同じ紙の塗り絵をしたりなど、真似をしながら遊んでる姿も見れました。↓（一方は「歌っている」と正しく書いているが、もう一方は「歌ってる」と、「い」が抜けている。さらに、一方は「見られました」と書いているのにもう一方は「見れました」と「ら抜き言葉」で書いている）

＊今日は３歳児のクラスで実習しました。すごく驚いたことがたくさんあり、私の頭の中で想像していた３歳児はもう少し保育者に援助されていたり、あまり一人でできることが少くないと思っていましたが、今日、３歳児の子どもと見て関わって驚ろきました。↓（一方は「驚いた」と正しく書いているが、もう一方は「驚ろきました」と送りがなが間違っている）

＊今日は５歳児のクラスで実習させていただき、ごっこ遊びをしました。子どもは色々なものにたとえるのが上手で、やっぱり幼児はごっこ遊びが得意なんだなと思いました。ごっこ遊びは一人ひとりの特意なことがすごくわかるので、見ていてすごく楽しいし勉強になります。↓（一方では「得意」と正しく書いているのに、もう一方では「特意」と間違って書いている）

＊実習の最終日は、なるべくたくさんの子どもと関わろうと思って望みました。外遊びでは鬼ごっこをしました。私が鬼をやって逃げる子どもを見てると、逃げている途中で転んでしまう子どもがいて、それを見ていた別の子

が「だいじょうぶ」と言って駆け寄って助けてあげてる姿が見れました。これからも積極的に実習に臨みたいと思います。→（初めは「望みました」と間違っていたが、その後で「臨みたい」と正しく書いている。また、「見てる」「あげてる」「見れました」と「い抜き言葉」「ら抜き言葉」を書いている。

＊今日は実習2日目で、子どもの名前も少し覚えれて楽しく1日を過ごせたと思います。あしたはもっと多くの子どもと楽く遊びたいと思いました。→（「覚えれて」と「ら抜き言葉」を書いている。また、初めは「楽しく」と書いていたにもかかわらず、次は「楽く」と「し」が抜けている）

＊今まで0歳児と接する機会がなく、今回の実習が始めてだったので、初日の朝はハイハイをしている子どもにどのように接っしたらよいか戸惑ってしまいましたが、先生が一つ一つの動きを理由も含めて説明していただいたので、子どもとの関わり方にも少し自身がつきました。→（初めは「接する」と正しく書いていたものの、その後では「接っしたら」と不要な「っ」を書いている。また、「先生が…説明していただいた」のではなく、「先生に…説明していただいた」か「先生が…説明してくださった」と書かなくてはならず、さらに「自身」ではなくて「自信」と書かなくてはならない）

＊幼稚園実習では年齢が3歳以上の子ども達だったので、保育園実習で0歳児や1・2歳児との関わり方に苦戦しました。しかし、0歳児から除々に年齢が上っていく形でクラスに入れたので、幼児達の発達段階を肌で感じることができました。→（一方では「子ども達」と書いているが、一方では「幼児達」と書いている。なお、「除々に」は「徐々に」が正しい）

＊子どもを観察しながらメモを取っていて、こども達のようすを見失ってしまったり、子ども達の言葉がけに気づけなかったことは、自分にとってもチャンスを失なってしまうこととつながってしまったと感じました。→（一方で「こども達」と書きながらもう一方で「子ども達」と書いている。また、初めは「見失って」と正しく書いていたにもか

かわらず、その後で「失なって」と書いている）

＊子どもが自分に何か言おうとしていましたが、自分はわからなくてとても困りました。もう少し子どもの心を理解して困まらないようにしたいと思います。↓（初めは「困りました」と書きながら、その後で「困まらない」と、不要な「ま」を書いている）

＊今回の実習は1歳児クラスからスタートし、2日ごとに2・3・4・5歳児クラスに入り、最後に0歳児クラスを見させていただきました。こんなに短い期間で乳幼児の成長が見れることとなんてないので、とてもおもしろかったしとても感動しました。子どもの1年は短かいですが、本当にいろいろなことが見られる大事な1年だと思いました。↓（初めは「短い」と書いていたが、その後で「短かい」と、不要な「か」を書いている。また、初めは「見れる」と「ら抜き言葉」を書いているのに、その後は「見られる」と正しく書いている）

＊0歳児の子どもと接してみて一番難しかったのは、泣いてるときの対応です。なぜ泣いてるのか、どうしたら落ち着くことができるのかが難かしいなと感じました。↓（初めは「難しかった」と正しく書いていたのに、その後で「難かしいな」と間違って書いている。また、「泣いてる」と「い抜き言葉」を書いている）

＊りす組で1回目の実習を終え、1歳児との関わり方を少しづつ理解できました。しかし、人見知りをする子が多く、関われる子どもたちには限りがありました。少しずつゆっくり仲良くなれるよう関わり方を見つけていきたいと思います。↓（初めは「少しづつ」と間違っていたが、その後は「少しずつ」と正しく書いている）

＊実習12日目でした。今日は自習期間中で初めての主活動が制作を体験しました。↓（初めは「実習」と書いていたが、その後で「自習」と間違って書いている）

＊初めての土曜保育を経験させていただき、普段とは違った動きや子どもの数や異年齢児との接っし方を観察することができ、とても新鮮でした。また、もも組さんとの初めて接することができ、色々な場面で自分でできるよ

うになっており素晴らしいなと感じました。↓（初めは「接っし方」と間違って書いていたのだが、その後で「接する」と正しく書いている）

＊今日は紙芝居と手遊びをさせてくださり、有り難うございました。登上人物に合わせてどんなに登場人物が多くても声を変えられるように練習しようと思いました。↓（初めは「登上人物」と間違って書いているのだが、次は「登場人物」と正しく書いている）

＊2つめは保育士の方たちの子どもに対する声かけや配慮です。0歳の子どもはほとんど保育士の方が援助していましたが、2歳から4歳児はできるだけ保育士が援助せず、子どもたちでやるようすを見まもっていました。その時に、保育士の方は子ども一人ひとりに合った声かけをしていました。そうすると、子どもたちは興味感心を持ったり自分で何かやろうと思ったりしていました。子どもが何かに関心をもってやることはとても大事だと学びました。↓（何かに興味を持つ場合は「関心」であり、心に深く感じたときは「感心」と書かなくてはならない）

＊子どもたちの性格がさまざまなので、その子にあった声かけ・1日の中で少しでも成長できるように子どもたちとどう接っしたらいいか考えて日々の生活を送っていきたいと思いました。11日間という短かい間でしたが、子どもたちに対する接し方や声のかけ方など、たくさんのことを学ぶことができました。↓（一方で「接っしたら」と書きながらもう一方で「接し方」と書いている。また「短い」は「みじか」までが漢字の読みである）

五-4、正しい書き方を知らないないための漢字や送り仮名や文章の間違い

＊反省することは、ブロック遊びの時のおもちゃの貸し借りのことで少しケンカをしている子どもにどのような声かけをすべきなのか適切な考えが出てこなくて困まってしまった場面がありました。↓（「反省することは」という主語に対する「場面がありました」という述語は正しくない。また、「困まってしまう」は、送り仮名が正しくない）

＊今日はプレイルームに行ってリズム遊びをしていて、とても楽しそうでした。もも組の真似っ子をして私も久しぶりにリズム遊びをしましたが、とっても懐しいと思いました。→（初めは「とても」と書いているにもかかわらず、その後は「とっても」と話し言葉で書いている。また、「久さしぶり」という送り仮名は正しい書き方ではない）

＊今日はホールでお店屋さんごっこをしました。みんながとても楽しそうにしていたのですが、大勢の中では私の声がなかなか通りずらいので、なるべく大きな声が出るようにしたいです。→（「通りずらい」は間違いで、「しにくい」という意味の「辛い」であるから「づらい」と書かなくてはならない）

＊今はインフルエンザがとても流行ってるので、細めに手洗いやうがいをして、マスクをかけ気おつけたいと思います。→（「流行ってる」と「い抜き言葉」を書いている。また、「細かい」と「細い」を書き分けることができない学生が非常に多くなっている。さらに、小学校で学習している助詞の使いかたが身についていない学生も増えている。その一つの例が「気をつける」と書くべきところを「気おつける」と書く例である）

＊先生から「もっと積極的に子どもに話しかけて」と言われたので、残りあと2日間ですが、できることはがんばり、後悔しないように恥ずかしがらずに接極的に話かけようと思います。→（初めは「積極的に」「話しかけ」と正しく書いていたのに、その後では「接極的」「話かけよう」と間違って書いている）

＊1歳児クラスでは、一人ひとりの生活リズムが整っていないので、食事や排泄・着脱・牛睡などといった活動を同時に進めなければいけない場面もあるので、保育者同士の連携が大事だと思いました。→（「午睡」と書くべきところを「牛睡」と「牛」の字を書いている）

＊今日は手遊びと絵本をやりました。とても緊張しましたが、手遊びをやり初めたら子どもが反応してくれたのでよかったです。絵本は子どもたち全員に見れるように持つのが難しかったですが、読み始めると真険に見てくれたのでうれしかったです。→（動詞の場合は「始める」と書くことが理解できていない例である。また、「見れる」のよう

に「ら抜き言葉」が書いてあり、さらに「真剣」の意味がわかっていないため、「けわしい」「あぶない」の意味の「険」を書く学生も少なくない）

＊1歳児から5歳児のクラスを観察させていただき、クラスの中でも、言葉や言動の発達に差があるため、「一人ひとりにあった適切な補助や援助をすることが大切だ」と指適していただきました。↓（「言動」には「言葉」と「行動」の二つの意味が含まれていることがわかっていない。このような理解不足の学生も多くなっている。その顕著な例としては「句読点」があげられる。学生の多くが「句点　。」と「読点　、」の区別がついていない。また、「指摘」と書かなくてはならないにもかかわらず「適当」「適切」の「適」を書いている）

＊子ども一人ひとりを利解して、その子に会った保育をすることも保育者の大事な役目だということが分かりました。↓（「利解」は「理解」と、「会った」は「合った」と書かなくてはならない）

＊今日一日丁寧なご指導有り難うございました。初めてすみれ組さんに入り、うめ組さんから入ったので援助の仕方等全く違く最初（「違く」の後に「、」が欠如している）は少しとまどいました。言葉も話せるようになり夏より大きくなっている姿を見れて感動しました。↓（「違く」という日本語はないが、このように書いている学生は非常に多くなった。また「見れて」と「ら抜き言葉」を書いている）

＊声かけの仕方など、まだまだ至らぬ点がたくさんなので、保育者さんの指導をよく観察し、この機会を通し自分の力になるよう、見る視点を変えながら実習に望みたいと思います。↓（ここでは「望みたい」を「臨みたい」と書かなくてはならない。表意文字と言われる漢字には一つ一つに意味があるため、発音が同じ場合でも、その意味を考えて使わなくてはならないが、そのことが理解できていないための間違いであり、これは最近の学生に特に多くなっている）

＊自由遊びを公園でしたときも、一緒に追いかけっこを責極的にやろうと言ってくれました。とても嬉しくて私も責極的に関わっていくことができました。↓（正しくは「積極的」と書かなくてはならない）

＊今日はお買い物ごっこだったので、いつもと全然雰囲気でした。→（おそらく「いつもと全然違う」と書くつもりだったのだろうが、注意不足から「違う」を書き忘れたのであろう）

＊子どもの遊びは幼児期にとって大切なものであり、創造力が目生え、どんどん遊びが広がっていくものだと思います。→（「芽を出す」のであるから「芽生え」と書かなくてはならない）

＊本日は実習最終日でした。今まで先生方に教えてくださったことを今日一日で実践できたかなと思いました。→（これも助詞が正しく書けない例で、本来は「先生方が教えてくださった」か「先生方に教えていただいた」と書かなくてはならない）

＊先生方の声かけや援助を見て学んで、時間が立つにつれて除々に子どもたちと関われるようになりました。→（これは時間の経過であるから「時間が経つ」と書かなくてはならない。また、「除々に」は「少しずつ」の意味であるから「ゆるやかに」の「徐」を書かなくてはならない）

＊保育者という職業は、子どもたちの成長を伝伝う大切な役割だと思っていたので、今日目の前で子どもの成長していく姿を見られて非情に刺激になりました。→（これは「手伝う」の「伝」に気を取られて「伝伝」と書いてしまったのであろう。また、「非情に」は意味が異なった言葉であるが、その意味を考えないで「非常に」と発音が同じために書いたのであろう）

＊今日は3歳児クラスに入らせてもらいました。昨日まで援助をしていた1歳児とは全然違くて、自分でできることの多さに関心しました。→（「もらいました」は「いただきました」と敬語で書かなくてはならず、「違くて」という言葉はなく「関心しました」も「感心しました」と書かなくてはならないはず）

＊今回の反省点は名前と顔が一致する子どもの数が少なく、完壁に覚えることができなかったところです。→（「かんぺき」は完全無欠の玉（宝石）という意味であるから「完璧」でなく「完璧」と書かなくてはならないのだが、最近は

「壁」と書く学生が多い）

＊外遊びでは、道具の貸し貸りで、年上の子が小さい子に貸してあげる姿などが見ることができて、子どもの成長する機会をもっと作れたらいいなと思いました。→（「貸す」と「借りる」は別の漢字であり、「姿などを見ることができて」と書かなくてはならない）

＊いろんな子がいる中で、例え他の子よりも行動がゆっくりでも最後まで自分でやりとげることに意味があるし、それが自分の成長につながっていくのだと思います。→「いろんな」は話し言葉であるから文章に書くことはない。また、「仮に」という意味の「たとえ」は「たとい」であり、普通は仮名で書くが、あえて漢字で書くなら「仮令」「縦令」である。しかし、ほとんどの学生は「例え」と書いている）

＊今日は始めて1歳児のクラスで実習をしました。先生方は安全面に留意して、目を離すことなく均等に散らばって配置されてる場面は、この学年で強く感じられました。得に1歳児では「子どもの命を預かっている」ことや保育士の仕事の責任の大きさを改ためて知りました。この学びをしっかりと受け取め、さらに気配りを身につけたいです。→（「されてる」は「い抜き言葉」であるから正しくは「されている」と書き、「得に」は「特に」が正しい。また「改ためて」は送り仮名が間違っているので「改めて」と書かなくてはならない。さらに「受け取め」も正しくなく「受け止め」と書かなくてはならない）

＊今回の実習で多くのことを学ばさせていただきました。1つめは子どもの年齢によっての発達のようすやクラスによっての発達の違い、そして同じ年齢の子どもでも月齢によっての発達の違いなどを学ぶことができました。0・1・2歳児の子どもは月齢によっての発達の違が、3・4歳児に比べて発達の差が大きいということを観察実習で実際に子どもたちのようすを観察することによって感じることができました。→（「学ばさせて」は「さ入れ言葉」であるから正しくは「学ばせて」であり、「ちがい」は「違い」と書かなくてはならない）

六、文章が書けなくても意に介さない学生

ここでは、実習日誌の中から主として「1日の実習の振り返り」として書かれた13行（11日間分）の文章中に見られた「注意力が欠如していると言わざるを得ない書き方」と「正しい書き方を知らない学生の文章」の一部を紹介し、わかりやすいように傍線を引いた。そして、それぞれについて簡単なコメントをつけておいたが、ほとんどチェックをする必要のない日誌はほんのわずか（全体の10パーセントほど）しかいない状況で、多くの学生の書き方はあまりにも「御粗末」と言わざるを得ないのである。

学生の文章の紹介が長くなったが、それは学生の実態を知ってほしいからである。わずか13行ほどの文章を書いていているにもかかわらず、数行前に書いた漢字と異なった漢字を書いたり、初めは送り仮名が正しかったのに次は間違っていたりという文章が頻繁に登場する。このような、注意力が欠如したと思われる書き方をしている学生が如何に多いかを問題にしなくてはならないと筆者は考えている。その理由は、「これで子どもに十分な注意を向けることができるのか」という疑問が生じるからである。

日本では古くから「文は人なり」と言われてきた。その理由は、文章にはそれを書いた人の考えや考え方の傾向はもとよりのこと、文章を書いた人の「人となり」までも残らず現れていると考えられるからである。筆者は以前、次のように書いたことがある。

> 文章を読めば、それを書いた人の考え方がわかることは当然ですが、文章が私たちに語りかけるものはそれだけではありません。文を書いた人の性格から考え方の傾向や能力まで、さまざまな情報が読みとれることを意味しています。（註6）

それだけに、実習日誌に見られるこうした文章表現を見逃すわけにはいかないのであり、さらに重要なのは、その

対応をしっかりと行うことである。

こうした現状にもかかわらず、「小さい頃から幼稚園の先生にあこがれていた」「保育園の先生になることが夢だった」と思っているだけで、そのためにどのような学習や実技の練習が必要なのかをしっかりと考えようとしない学生が非常に多い。短大に入学する前ならば「あこがれ」や「夢」でよいかもしれないが、保育者をめざして学習を始めたなら、どのような知識や技術が求められているのかを考えなくてはならない。ただ残念ながらそのことが理解できない学生が相当数いることも事実である。（註７）

このような問題に対して、幼児期の教育の重要性や「せんせい」と呼ばれてお手本とされる保育者の立場、保護者に信頼される保育者のあり方等について授業の中で繰り返し注意を喚起してきたものの、期待したほど学生の心に響くことはなかった。

七、保育者をめざす学生に対する〈いのち〉の授業

そこで考えたのが〈いのち〉についての話である。その理由は、以前に知り合いの園長先生から野菜の栽培をする中で非常に興味深い子どもたちの反応についての話を聞いたからである。そのできごとを紹介しておこう。

群馬県T市に隣接するA保育園では毎年、園庭の隣に設けられた畑で子どもたちといろいろな野菜を栽培している。あるクラスでミニトマトを栽培したときのことである。先生が用意したミニトマトの苗を植えて、みんなでときどき水やりをしながら成長を観察していた。やがて、かわいらしい花が咲いて小さな実がたくさんついてきた。

こどもたちは毎日トマトのようすを観察して先生に知らせに来るが、その表情はいきいきと輝いている。トマトの実がだんだん大きくなって赤みを帯びてくると、子どもたちの声が一段と熱を帯びてきたそうである。「先生、

赤くなってきたよ」「いつ採るの」「もっと赤くなってからね」（これは先生の言葉）「先生、〇〇個なっているよ」

子どもたちの声も日に日に大きくなっていった。

先生が「それでは〇日に採りましょうね」と言うと、翌日からは「先生、あと〇日だね」とカウントダウンが始まったそうである。約束の前日は「先生、明日だよね」「天気になると良いね」と、お帰りのしたくをしているこどもたちは本当に楽しそうだったと担任の先生が話していた。いよいよミニトマトを採る日になると、登園した子どもは口々に「先生、今日だよね」「お天気で良かった」と本当に嬉しそうだった。

ところが、子どもたちと一緒に畑に行った先生が、「さあ、みんなで採りましょう」と声を掛けても、だれひとり採ろうとしなかったそうである。あれほど楽しみにしていたので、不思議に思った先生が「どうしたの」と声を掛けると、子どもの口から「だってかわいそうだもん」という意外な言葉が返ってきたというのである。（註8）

このできごとを筆者に話す園長先生の表情は、本当に嬉しそうだった。そして、次のようにおっしゃったのである。

「私はトマトを採るのがかわいそうだなどと、子どもたちにひとことも言ったことはありません。でも、心をこめて育てていると、大切にしなくてはいけないという気持ちになるのですね」。このお話を伺いながら、〈いのち〉と触れあうことがどれほど大きな意味を持っているかを教えられたように思った。

また、ある園長先生からピーマンを育てたときの話を伺ったことがある。その園では、ピーマンやナス・キュウリなどを子どもたちと一緒に育てて給食の材料に加えていた。みんなで色々な野菜の苗を植えて水をやりながら世話をしていると、やがて花が咲いて実がなって収穫の時期を迎える。そのたびに、子どもたちの楽しそうな言葉が飛び交っていたそうである。そして、園長先生は「ピーマンは独特の匂いや味がするので子どもにはどうかなと思っていたのですが、みんなで育てたピーマンを給食に使った日は、ピーマンが嫌いだった子もおいしそうに食べていました。私はとても感動したので、園だよりに野菜を育てることの意味を書いて保護者の方にお伝えしました」とおっしゃっ

ていた。

こうしたことから、筆者は学生に〈いのち〉の話をすることにした。その理由は、私たちがこの世に人として誕生することがどれほど得がたいことなのか、そして、誕生した後もどんなことで終わりを迎えるかわからないことに気づいて、自分の生命を大切に生きるとともに自分以外の生命も大事にしてほしいと考えたからである。その要点を紹介すると次のような内容である。筆者は「仏教保育は〈いのち〉の大切さに気づいて生きる」ために非常に重要な保育である」と考えている。

特に、「近代文明は生の充実・拡大にまい進し、生きることとしか考えずに「死」を思考から排除し、死生観や自然観を見失ってしまった」と指摘される（註9）状況では、「生まれた〈いのち〉が必ず死ぬことを前提にして、今をどう生きるかを探究した仏陀の教え」こそ私たちの生き方の羅針盤と考えるからである。

①私たちが人としてこの世に生を受けるための受精の確率が限りなくゼロに近いこと。

（女性の体内にある卵子の数はおよそ700万個であるが、そのなかのたった1つの卵子が受精して私の〈いのち〉になったのである。一方で精子は一度に放出される1億から2億のなかのたった1つが受精する。このことから、簡単に計算するなら、私という生命がこの世に誕生する確率は700万分の1×1億分の1で、700兆分の1という非常に小さな確率であることがわかる。言いかえると、この世に自分が人として誕生することは奇跡的なことなのである）

②次に受精卵に注目すると、受精卵の細胞の数はたった1個であるが、母親の子宮の中で過ごすわずか10か月ほどの間に60兆個という数まで細胞分裂をくり返し、人としての身体やさまざまな内臓が形成されて誕生したことを忘れない。

（まさに「造化の妙」としか言いようのない不思議なことであるが、時にはその細胞分裂の過程でトラブルの発生することがあり、身体的な障害や精神的な障害を持って誕生する場合もある）

③世界中で自分の〈いのち〉はたった1つしかない、かけがえのない存在であることを忘れない。
（誰の〈いのち〉も世界中でオンリーワンの存在であり、他人と比べて序列がつけられないのであるから、自信を持って生きなくてはいけないことに気づくこと）

④それほど尊い〈いのち〉でも、永遠に生きることはできず、誰にも必ず「終わりの日」が訪れる。しかも、「その日」がいつなのかは自分を含めて誰にもわからない。
（だからこそ、いつ終わりが来ても後悔することがないように、1日1日を大切にして精一杯生きなくてはもったいない）

⑤自分の〈いのち〉は自分一人で生きているのではなく、自分以外の多くの人や動植物の〈いのち〉とつながって生きていること。
（私たちは自分以外の生き物から孤立して生きることができないことに気づき、自分以外の人や動植物との関わり方について学ぶ必要がある）

⑥私たちにとって最も大切なことは、自分に与えられた「終わりが来るまでの時間」をどのように使ったらよいかをしっかりと考えて行動することである。

以上が、第1回目の授業を始める前に「保育者をめざす短大生として考えてほしいこと」として話していることの概略である。筆者は生物学を専門に学んだわけではないので、話の内容は学生が理解しやすいように、中学校の理科や保健で学習する内容を基本にしている。ところが、簡単な内容であったものの、こうした話をするようになって驚いたことがある。それは、1クラスがおよそ50名足らずの学生（全体で5クラス）なのだが、どのクラスでも何人かが必ず涙ぐみながら聞いていたことである。

保育者の役割は「保護者から託された乳幼児の生命を保護すると共に、望ましい成長のための援助をする」ことであるから、当然〈いのち〉について考えているだろうと思っていたが、そうではなかった。そのことは、授業後の感

想としてほとんどの学生が「今まで命について考えたことがなかった」と話していたことからも確認できた。筆者は毎回〈いのち〉の話を聞いて考えたことのレポートを課しているので、その一部を紹介してみよう。

【学生A】ひとつの〈いのち〉が誕生することは、すばらしい奇跡であるように思いました。そして、〈いのち〉はとても重いものであり、人の〈いのち〉は等しく尊重されるべきものであると思います。どのような〈いのち〉もかけがえのない、たったひとつの〈いのち〉であり、代わりなどいないことを忘れてはいけないと思いました。

【学生B】私は〈いのち〉についてあまり考えたことはありませんでしたが、先生の講義を聞いてからニュースを見たり新聞を読んだりするようになりました。

【学生C】この世に生まれてきて、死んだ方がいい人も生きていてはいけない人も存在しないので、生きていることに感謝し、誇りを持ち自信を持つことがたいせつだと思いました。

【学生D】私は今まで生まれてきてあたりまえだと思い、あたりまえのように生活してきましたが、今日の先生の話を聞いて、その考えは間違っていたと気付きました。

【学生E】保育者をめざす私は、もっと真剣に勉強しなくてはならないと思いました。また、子どもに関わる（お手本になる）のに、二年間では勉強が足らないのではないかと心配になりました。もっと自分から積極的に学習していかなくてはならないと改めて思いました。

【学生F】自分は他の誰でもない世界中でオンリーワンの存在、そして誰もが他の誰でもないたった一人しかいない存在。それを誇りに思うべきだと思います。自分でいることが嫌になって、あんな人になりたいと思うこともあるけれど、自分の良いところを見つけて自分でいることに自信を持ちたいと思います。

学生から提出された感想を読むと、ほとんどの学生が今回の話を聞くまで〈いのち〉について考えたことがほとんどなかったことがわかった。多くの学生が共通して感じたことは、

①これまで〈いのち〉について本気で考える機会がほとんどなかったこと。
②これまでは、この世に生きていることをあたりまえだと思っていたこと。
③この世に生まれる確率がこんなにも小さいことに驚いたり感動したりしたこと。
④〈いのち〉がどれほど大切なのかに気づかされたこと。
⑤自分の〈いのち〉が本当に1つしかないことに気づかされたこと。
⑥自分の〈いのち〉がいつまでもあるのではなく、ある日突然に終わりが来ると聞いて驚いた。
⑦自分の〈いのち〉の終わりがいつ来るのかがわからないのだから、一日一日を大切にしなければいけないと本気で思った。
⑧自分を産んでくれた両親に感謝しなければいけないと思うようになった。
⑨保育者として、子どもの〈いのち〉をしっかり守らなくてはいけないという気持ちになった。
⑩子どもにも保護者にも〈いのち〉の大切さを伝えようと思った。
等である。

期待以上の反応が見られたが、このことは、多くの学生にとって〈いのち〉について考える場がいかに少ないかを表すものでもあるから、これからも保育者をめざす学生に対して〈いのち〉について考える機会を提供する必要があると考えている。

八、〈いのち〉の授業から見えてきたことと仏教保育

ここで、すでに紹介した園長先生の言葉に再登場していただこう。それは「私はトマトを採るのがかわいそうだなどと、子どもたちにひとことも言ったことはありません。でも、心をこめて育てていると、大切にしなくてはいけな

いという気持ちになるのですね」というものであった。

１９９９年に岡部・戸瀬・西村らによって『分数ができない大学生』（註10）が出版されて以来、大学生の学力低下がしばしば問題にされてきたが、実態は大学生になって急に学力が低下したのではない。少子化で大学受験生が減少しているにもかかわらず大学が増加し続けた結果、「低学力でも大学に入学できる」ようになっただけのことである（もちろん、特定の大学への入学を希望する場合は別だが）。そして「最高学府」である大学への入学が容易になった結果、一部の児童生徒を除けば学習に対する意欲が低下しているのである。つまり、大学生の学力低下の芽はすでに小中学校にあると言える。

こうしたことは、次のような調査からも明らかにされている。例えば東京大学社会科学研究所とベネッセホールディングスの社内シンクタンク「ベネッセ教育総合研究所」が２０１４年に「子どもと学び」の実態を明らかにする共同プロジェクトを立ち上げて、小学校１年から高校３年の児童生徒の学習の実態や変化を調査した結果を明らかにしているが、それによると「中2で学習離れ・6割が勉強嫌い」といった衝撃的な結果が示されている。「教育学術新聞（平成29年4月26日）」には

勉強が「嫌い」（まったく＋あまり好きではない）は、小1～小6では2～3割にとどまる。しかし、小6生から中2生にかけて２６．０ポイントも増加し、中2生で約6割にも達する。

と深刻な状況が報告されている。ただ、その一方で

勉強が好きになった子どもは、「新しいことを知るのがうれしい」という内発的な学習動機をもって勉強している比率が高い。

という、興味深い指摘もある。筆者はこの「内発的な動機」こそが野菜栽培を通じた幼児の好奇心を満たすことにつながり、〈いのち〉を大切にする心を育むことに発展していくのではないかと考えている。言いかえると、頭ごなしに

「勉強しなさい」と指示するのではなく、今こそ子ども（幼児から小学生・中学生を含む）が好奇心を持って取り組もうとする環境設定が求められているのではないだろうか。

人は本質的に好奇心旺盛な生き物と言われる。知らないことや初めて見るものに対して「なんだろう」「なぜだろう」という疑問を抱くのは自然なことであろう。そして、それが学習の出発点になる。そうした行動の萌芽は、赤ちゃんの行動によく見られる。この世に誕生して日が浅い赤ちゃんにとって、目にするものや聞くものの多くが初めてのことであるから、物音が聞こえれば音の方向に目を向けるし、何かが見えれば近づいたり触ったり嘗めたりしながら確かめるのである。

こうした赤ちゃんの好奇心と行動力こそが、成長や発達の原動力になっているのではないだろうか。さらに、そうした成長や発達を促進するのが周囲にいる人との関わりであろう。それこそが「あそび」である。言いかえると、子どもの遊びは学びなのである。そのことを示すのが「幼児期の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として云々」（『幼稚園教育要領』第一章総則第1幼稚園教育の基本）である。

このことは『保育所保育指針』の第一章総則 1保育所保育に関する基本原則にも「子どもが自発的・意欲的に関われるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にすること、特に、乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること」と示されていることからも窺えよう。

こうした指摘と学生の〈いのち〉の授業の感想から見えてきたことは、幼児期から大学生に至るまでの学習が「単なる知識の習得」に偏り過ぎて、「生きている」という実感や感動が伴わないないようになっているのではないかということである。早期教育の名のもとに幼児期に十分な遊びも経験せず、楽しさを感じる機会もないまま小学校に入学し、その後は「お勉強」という錦の御旗のもとで生活体験やお手伝いがカットされた結果、身体と心の一体性から得

られる充実感を感じることもなく、「意欲的に学ぼう（取り組もう）という意識をスポイルされてしまった」のが現在の学生の姿ではないだろうか。

もちろん、大学生の学力低下や学習意欲の低下に対して、それなりの「改革」が試みられていることは否定しないが、その成果がなかなか見えてこないように思えてならない。その原因は、〈いのち〉の本質を見失ってしまった現在の日本人そのものにあるのではないだろうか。

『幼稚園教育要領』や『保育所保育指針』を読んでいて感じるのは、幼児期は「身体活動がどれほど重要か」という点である。私たちの〈いのち〉は、身体と心（精神活動）の相互作用（調和を保つこと）によって成り立っている。どちらが上位でどちらが下位と序列はつけられない。それにもかかわらず、幼稚園以降の学校教育の場では、身体の活動よりも「知識を習得すること」に重きを置きすぎたり身体活動と知的活動とを分離したりしているのではないだろうか。子ども時代の十分な遊びがその後の学習意欲にもつながることは、次に紹介する高橋敏之・梶谷信之・尾上雅信の研究でも明らかである。

1～2世代前までの子ども達は、杉玉鉄砲・叩き独楽・竹とんぼ・竹馬・割り箸銃・カン下駄・ブーメラン・パチンコなどを日常的に作って遊んでいた。

これらの手作り遊具には、制作の段階に最初の学びがある。子どもは、制作に必要な鋸（のこ）・鉈（なた）・錐（きり）・鉋（かんな）・小刀・金槌・ペンチなどの道具が使えるようになる。作った遊具で遊んでみると、必ず不具合に気づく。不具合な部分を作り直して、より高い水準で遊びたくなるのが人間の本性である。不具合を作り直せるということは、遊具の仕組みが分かっているということである。

制作上の試行錯誤は、創意工夫と忍耐力を養う。遊具の作り方や道具の使い方は、大人や年長者が年下に教えていた。教え教わるの関係は、人間関係の調整能力を学ばせる。教わっていた者は、やがて教える者になる。こ

のようなくり返しは螺旋状の循環性を形成し、その中に遊びの学習化が存在する。このように手作り遊具を媒体にした子ども文化には、遊びの中に多くの学びがあると言える。

と、遊びの重要性についての貴重な示唆を提供している。（註11）

ところが、残念ながら「現代は、小学校に入ると同時に学びと遊びの分離が始まる」ところに問題があると高橋らは指摘する。そして、その指摘は保育科の学生にそのままあてはまる。高橋らが指摘した小学校以来の「教育の成果」が5節で紹介した学生の姿なのである。そのため、今、私たちが考えなくてはならないことは身体活動と知的な学習の調和・融合であり、人や自然と関わって積極的に活動することである。特に幼児期に思い切り身体活動をすることが重要であろう。それも、保育者が指示して「あそばせる」のでなく、子どもの自発的・主体的な活動に大きな意味がある。

それゆえ、保育者をめざす学生は、子どもと一緒に楽しく遊びながら、「子どもが自発的主体的に遊ぶための援助ができる人」になってほしいと筆者は考えている。平成27年の3法令同時改訂（定）で「幼児期の終わりまでに育てたい10の姿」が示されたが、その多くはこれまで述べてきた〈いのち〉に関することであり、人や自然との関わりであり、幼児が生得的に備えている好奇心に関することではないだろうか。せっかく、こうした幼児教育の手掛かりが示されたのであるから、すでに指摘したように「単なる学習」の目標にしないようにしたいものである。

九、保育者の注意力・集中力を高めるために

本稿では、保育実習日誌に見られる学生の実態を紹介しながらそのことが意味する問題を指摘したが、現在は完全な「保育者不足」である。特に筆者が住んでいる群馬県ではここ数年、幼稚園はもとより保育園においても「こども園」への移行が急速に進んで新規採用者が急増し、完全な「売り手市場」の様相を呈している。短大を卒業して幼稚

園教諭の免許と保育士資格が取得できれば、就職は保証されているようなものである。そのため、学生の中には「勉強なんかしなくても就職先はすぐに見つかる」と高を括っている者も少なくない。

しかし、就職内定がゴールでないことは言うまでもない。就職してから日々の保育が確実に行えるか、保護者や子どもから信頼される保育者になれるかを忘れてはならないはずである。「ケアレスミス」を繰り返したり子どもの生命に重大な危害が及ぶような事故を起こしたりすると、保育者生命を奪われてしまう。それだけに、私たちは改めて保育者の役割の第一が「子どもの生命の保護」であることを確認しなくてはならない。子どもには「何が危険であるか」を認識する力は育っていないため、大人が想像しないような行動をすることもある。注意力や集中力が欠如したままで、その生命が守れるだろうか。

さらに、乳幼児の生命を保護することは、「在園中の生命を保護すること」だけではないのである。「10年後あるいは20年後に、どのような〈ヒト〉として生きてほしいのか」を考えながら「適切な言葉かけや援助」をすることでもある。それが、「生涯にわたる人格形成の基礎を培う」（幼稚園教育要領）ことであるし「子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす」（保育所保育指針）保育所が果たさなければならない役割のはずである。

そして、そのためには、乳幼児の心身両面に十分な注意を向けて一人ひとりに応じた言葉かけや援助を行わなくてはならないのであり、そのための学習の土台として保育者を目指す学生が「注意力」と「集中力」を身につけることは極めて重要なことであると言えるのではないだろうか。そしてそうしたことがらは、日常生活の一つ一つの行動を通して身についていくのではないかと筆者は考えている。

このことに関連して、最近の学生と接していて気になることが多くなった。それは学習内容ではなく、ちょっとした行動を「きちんと」行っていない（できていない＝身についていない）学生が増えていることである。そのいくつかを

あげてみよう。

①授業中に話をしっかりと聞いていない（聞けない。気持ちが散漫で集中できない）。

その結果、次のようなことが多くなった。

＊授業で数分前に説明したことを質問しても答えられない（覚えていない）。

＊レポートの題名を発表して翌週の授業で提出してもらうのだが、しっかり聞いてメモしていないためか、題名を間違えて書く学生が何人もいる。

＊レポートを書いていて間違った部分に修正液を塗っただけで、訂正後の文言が書かれていない。

＊筆者の授業では毎回レポートを提出するが、複数のレポートを後で整理しやすいように、何回目のレポートかを示す数字を原稿用紙の決められた位置に書くように指示しているのだが、指示通りに書いていない。

＊授業終了のチャイムが鳴る5～10分くらい前になると、授業担当者が話を続けているにもかかわらずノートやテキストを閉じてバッグにしまい始める学生が3分の1くらいもいる。

＊ホワイトボードに書いたことしかノートに書こうとしない（実習中は必要なことをメモすることが大事だから、授業を聞きながら要点をメモする習慣を身につけるようにと促しているが、ほとんどの学生は実行していない）。

②することが「いい加減」（「すればいいんだろう」という考えで、主体的に考えて工夫して行動しようとしていない）で、行動にケジメがつけられない。

＊授業開始前や終了時の挨拶がしっかりできない（きちんとお辞儀をしない・「おはようございます」が言えない）学生が少なくない。

＊授業中に机に突っ伏して居眠りをしている学生が10パーセント近くもいる（そのような態度が失礼であることは最初の授業で説明してあるのだが）。

＊私語をする学生がいる一方で、授業内容に関連した質問をしても答える学生は一部に限られている。
＊提出日に遅れて個人的にレポートを持ってきたときに、原稿用紙を筆者の方に向けて出さない学生が何人もいる（筆者はさまざまな機会を見つけて授業中に出し方のマナーについても話をしているのだが）。
＊授業でときどき配布するプリントがＡ３やＢ４の場合に半分に折ってもらう（意図的に折らせている）のだが、紙の端が多少ずれて折られていても気にしない学生が少なくない。

勉強は頭だけでするものではないはずである。人間の活動は、身体と心が密接に関わりあっている。それゆえ、日常生活をどのような意識で営むかは学生の勉強に取り組む態度にも大きな影響を及ぼしていると考えなくてはならない。学生の多くが「保育者になりたい」とは言うものの、主体的・意欲的に学習に取り組んでいる学生はほんの一部である。これでは、いくら売り手市場と言っても卒業後が不安になる。彼らの多くは、小中学校のころから勉強は嫌いと言って過ごしてきたようである。

また、その段階で「なぜ勉強することが必要なのか」を考える機会が十分に与えられなかったのではないだろうか。そのために、現在の日本では前述したように「勉強嫌いが中2で6割」という衝撃的な報告すら出されている（教育学術新聞・平成29年4月26日：東京大学社会学研究所と株式会社ベネッセホールディングスの共同研究）。

こうした傾向は高校生も同様で、少し古い資料だが国立教育政策研究所「高等学校教育課程実施状況調査」（平成17年度）によると、進路を決める大切な時期である高校3年生の平日の学校以外の学習時間がゼロの割合は約40パーセントという結果である。

同調査によると、大学生に関しても、柳井晴夫・大学入試センター教授らの研究グループが「大学生の学習意欲と学力低下」というテーマで全国調査をした結果、大学教員のうち10人中6人が大学生の学力低下を問題視していることが分かったという。特に私立大学では「深刻な問題」と「やや問題」を合わせると69パーセントを占めていて、①

自主的に問題に取り組む意欲が低い　②論理的に考え表現する力が弱い　さらには③日本語力や基礎科目の理解が不十分であることが指摘されている。こうした指摘がなされる背景には、勉強する目的が正しく認識されていない現状が存在するからではないだろうか。

そこで、まず必要なことは日常生活・日常の一挙手一投足をきちんと行動することから習慣づけることと筆者は考えている。すぐに大きな変化は起こらないであろうが、一つひとつの行動をきちんと実行し続けることによって、それまで気づかなかったことに気づいたり味わえなかった気持ちを感じたりする場面が必ず現れてくるものである。保育科に入学してくる学生の中には、勉強が嫌い・苦手な学生が少なくない。その学生に対して「じっと机に向かって勉強しなさい」と求めても長続きしないであろう。

それよりも、保育に関係する日常生活にコツコツとしっかり取り組ませることで、少しずつ意識に変化が現れてくるのではないだろうか。すると、子どもの心や身体について学ぶことにもだんだんと興味が湧いてくるのである。人は興味を持ったことには、言われなくても夢中で取り組んでいる。その理由は簡単で「楽しいから」である。小中高等学校で積極的に学習に取り組んだ経験がない学生も、保育者のやりがい（奥深さ・重要さ・おもしろさ）に気づいてくると、進んで学習や実技の練習に取り組むようになるのではないだろうか。問題は、一人ひとりに適した学習環境をどのようにして整えたら、そのような意識が芽生えてくるかを考えることであろう。

現在の学生の学習に対する深刻な状況を変えるためには「勉強しましょう」と促すだけでは効果は期待できない。遠回りかも知れないが、人間の身体と心が密接に関わっていることを前提にすると、筆者は日常生活の一つ一つの行動にしっかりと取り組む（身体を使って行動する）ことから始める必要があると考えている。それを裏づけるかのように、最近は「非認知能力」を育む取り組みが広がっている。たとえば、読売新聞（２０１8年8月10日）には「やる気、自制心　幼児期から」という見出しの記事で、次のように記されている。

子どものやる気や自制心、社会性などの「非認知能力」を育む取り組みが広がっている。文部科学省が6月に公表した昨年の全国学力テストの分析結果では、こうした能力が高い子は、学力が高い傾向が見られた。特に幼児期の教育が重要だとされ、大学では保育者の養成も進んでいる。

そして、「21世紀に活躍するのは、与えられた仕事をこなすのではなく、答えのない中で主体的に考え、行動、判断して答えを見つけ出せる人材だ」とも記されている。

また、お手伝いをすることが子どもの成長・発達に大きな意味を持っていることが既に指摘されている。そのことに関して岩立京子・東京学芸大学大学院教授は「お手伝いを続けていると段取りや計画性が身に付くので、学習にも役立つ」とまで言いきっている（「お手伝い　生活力育む」　読売新聞　２０１７年2月3日）。

家庭や学校で子どもに「勉強しなさい」と強要するだけでは効果は上がらない。むしろ勉強嫌いな子を増やしてしまうかも知れない。これほど子どもに対する教育熱が高まっているにもかかわらず、「勉強嫌いな子ども（大学生）」が増えている（「勉強嫌いが中2で6割」教育学術新聞　平成29年4月26日）のは、学校や家庭における教育に対する考え方に問題があるからではないだろうか。そうした問題の解決策として幼児期に「野菜や植物の栽培を通じた保育」を行うことは大きな意味を持っていると筆者は考えている。

筆者が保育園やこども園における野菜の栽培を勧めたり虫や小動物とのふれあい体験を行ったりするのはそのためである。都市化が進んだ今だからこそ、生命との直接的なふれあいが必要なのであり、そうすることによって、人として「生まれた」ことへの感動や、さまざまな〈いのち〉とつながって生きていることへの驚きや不思議さに気づくのではないだろうか。そして、死の「不可測性」と「不可逆性」といった生命の本質に目を向けて「今ここに自分が生きている」ことの不思議さと「はかなさ」に思いを致したとき、「自分は今をどう生きたらよいのか」を、大学生は大学生なりに、幼児は幼児なりに真剣に意識し始めるはずである。

仏教保育とは、仏教寺院が関係する幼稚園や保育園、こども園で行う保育という意味にとどまるものではない。幼児教育や保育の原点として子どもたちが〈いのち〉の本当の姿に気づいて、その〈いのち〉を精一杯に生きていく原動力としての意味を持っているのではないだろうか。

【註】

(1) 中村博志編著『死を通して生を考える』(リヨン社　2003年2月)
(2) 読売新聞記事(2014年7月29日)
(3) 拙稿「短大生の学習意欲と仏教教育――動機づけとしての〈いのち〉の話――」(『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』第14回　平成25年6月)
(4)『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第13号(平成20年)
(5)『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第25号(令和2年)
(6) 拙稿「コトバにご用心」(『月刊 仏教保育カリキュラム』2011年4月号　日本仏教保育協会発行)
(7) 拙稿「短大生の学習意欲と仏教保育――動機づけとしての〈いのち〉の話――」(『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』第14回　2013年)
(8) 拙稿「保育者をめざす学生に対する生命尊重教育の必要性について」(『育英短期大学研究紀要』第35号　2018年)
(9) 佐伯啓思『死にかた論』(新潮社　2021年)
(10) 岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄『分数ができない大学生』(東洋経済新報社　1999年)
(11) 高橋敏之・梶谷信之・尾上雅信「幼児期の子どもの遊びと学び」(『岡山大学教育学部研究集録』135　2007年)

【参考】なお、これらに関連して次のような興味深い指摘があるので参考までに紹介しておこう。

＊小松良子「自尊の感情を育てるいのちの学習」(『死生学がわかる』朝日新聞社　２０００年６月)

＊「子どもが危うい　第１部　からだ」(毎日新聞　２０００年１月１日)

この中で、「子供たちの、心と体が危ない。ぜいたくに偏食し、生活のリズムが壊れる。ストレスをため込む。からだが痛み、ゆがむ。人との距離感に迷い、見失う。…」といった問題が指摘されている。

＊養老孟司「子どもには体を使って働かせなさい」(週刊朝日　２００６年８月４日)

この記事の中で養老は「動物と触れあって死を実感する」と言っている。

＊「大学は幼稚園じゃない」(週刊朝日　２００８年４月４日)

(東大卒の肩書きはほしいが学問に興味もたぬ学生たち・塾通いして目指したのに入ると大学をばかにする・自分の知識不足を感じても勉強の方法がわからない・問題は学力より意思疎通の能力の低下)

＊「折り合う力　遊びで培う」(自制心、協調性が学びの基本に)(読売新聞　２０１７年５月４日)

＊「やる気、自制心 幼児期から　遊びを通じて身につける」

子どものやる気や自制心、社会性などの非認知能力を育む取り組みが広がっている。文部科学省が６月に公表した昨年の全国学力テストの分析結果では、こうした能力が高い子は、学力が高い傾向が見られた。特に幼児期の教育が重要だとされた。(読売新聞　２０１８年８月10日)

最後に、〈いのち〉を見つめる視点から筆者が執筆した原稿も紹介しておこう。

＊「〈生かせいのち〉の保育」(『わかりやすい仏教保育総論』チャイルド本社　２００４年２月)

＊「〈いのち〉とはなにか」(『月刊仏教保育カリキュラム』２０１６年5月号　日本仏教保育協会発行)

＊「野菜の栽培と〈いのち〉教育」(『月刊仏教保育カリキュラム』２０１６年8月号　日本仏教保育協会発行)

＊「子どもは授かる?・つくる?・」(『月刊仏教保育カリキュラム』２０１９年5月号　日本仏教保育協会発行)

＊「比べられない〈いのち〉の重さ」(『月刊仏教保育カリキュラム』２０１９年6月号　日本仏教保育協会発行)

＊「野菜の栽培で〈いのち〉を学ぶ」(『月刊仏教保育カリキュラム』２０１９年8月号　日本仏教保育協会発行)

＊「クモの巣に捕まったセミ」(『月刊仏教保育カリキュラム』２０１９年9月号　日本仏教保育協会発行)

＊「ミニトマトの花とナスの花」(『月刊仏教保育カリキュラム』２０２０年7月号　日本仏教保育協会発行)

＊「生命尊重の心と学習意欲の関係について――仏教保育・仏教教育の本質的な意味――」(『日本仏教教育学研究』第22号　平成26年3月)

＊「現代教育の盲点と仏教教育――幼児教育におけるお手伝いの意味――」(『日本仏教教育学研究』第25号　平成29年3月)

＊「幼児期の人間形成と仏教――身体活動の持つ教育的な意味を中心に――」(『仏教的世界の教育論理――仏教と教育の接点――』法蔵館　平成28年12月)

＊「短大生の学習態度と仏教教育――教育に及ぼす作務の意味――」(『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要第』18回　平成29年6月)

＊「心身一如を忘れた現代社会と仏教保育――身体活動の持つ意味を中心に――」『日本仏教教育学研究』第26号　平成30年3月)

(さとう　たつぜん・育英短期大学教授)